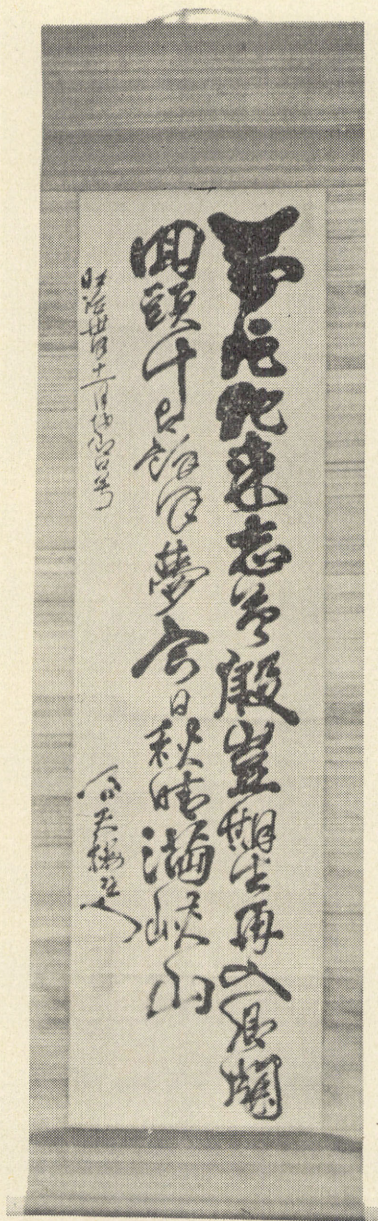


第十三編 人

物



皇月鶯溪先生の書

第十三編 人物

第一章 名譽町民

藤井日静上人

明治十二年（一八七九）十月一日東京神田錦町陸軍御用達の薪炭問屋豊後屋藤井太郎太の三男として生まれ、幼名三雄、父は豊後（大分県）臼杵藩主稲葉家の祐筆であったが明治維新後商家となった。

両親とも法華経に深く帰依し、篤信の故に明治二十六年（一八九三）九月望月日謙上人によって得度して教仁と改名した。山梨中檀林に学び更に東京錦城中学校卒業後、たまたま日露戦役勃発して旅順攻囲軍の一員として出征、傷病のため帰還後正則英語学校高等部を終え更に祖山大学を明治四十年（一九〇七）卒業する。

明治四十二年山梨県泉能寺住職、大正十二年（一九二三）京都満願寺住職となり、昭和十一年（一九三六）日蓮宗専任教師、十二年身延山御廟別当、十三年同執事、十七年東京身延山別院、二十一年身延山総務等を歴任して、三十四年七月身延山第八十六世の法主となる。

昭和二十四年権大僧正に昇叙、三十四年教仁を日静と改め三十八年第三十八代日蓮宗管長に就任する。

その間大正六年（一九一七）九月活動写真「日蓮聖人一代記」を独力で購入の上、日本全国朝鮮満州中国各地を上映布教して一大反響を呼んだ。

これは本邦映画布教に先鞭をつけたものと今日も高く評価されている。昭和三十五年身延山街頭布教隊を組織してその実績を挙げ、昭和三十八年十二月八日日本仏教会管長となり、真珠湾内アリゾナ艦上にて追悼法要を営み米軍極東海軍司令官、在ハワイ邦人に深い感銘を与えて感謝され、 Honolulu 市長より名譽市民の称号を受け、更に四十年サンフランシスコにおいて世界連邦世界大会に日本代表团名譽団長として参加し、「道義の実践」を提唱しハーグにおいて宗教委員会の組織を実現するなど世界宗教人として活躍する。その途次北米各地を巡教し、訪問地のポートルランド市長から名譽市民に列せられた。昭和四十三年十一月身延町名譽町民に推戴される。

第八十六世法主として入山にあたって、(一)常随給仕 (二)布教 (三)興学 (四)山林復興 (五)財政の確立の五大誓願をたてられて九十一歳の今日まで一日として朝の勤行を休まれた事がなく、街頭布教の先達となって全国を巡歴、布教教化につとめ、内にあつては身延山大学学長となって校舎大講堂の近代建築を竣工させ、続いて体育館寄宿舎等の完成を期して研学修道の環境整備に意を注ぎ、また、戦後乱伐のため荒廃した身延山に百五十万本の苗木を植栽し、赤字財政借財約二億円を整理返済して身延山財政を軌道に乗せ、その運営を確立する等、誓願実現とともに昭和四十一年には総工費八千万円を投じて身延町梅平に身延山病院を建設して、地域社会の医療施設の拡充に地域住民の健康保持に貢献されている。

昭和四十一年私学振興の功勞により勲三等瑞宝章を授与される。著述に「救国の宗教に生きる」を三十九年新潮社より発刊し「教報みのぶ」の巻

頭に毎月法話を載せて八百万信徒の心の糧となっている。

綱 脇 龍 妙 師

福岡県宗像郡玄海町（旧池野村）池田農儀右衛門の二男として明治九年一月二十四日生を享け、生来病弱のため福岡県法性寺住職日良上人の得度によって仏門に入り、専ら修練によって病魔を克服されたとともに日蓮聖人の御遺文と、特に法華經常不輕菩薩品第二十に感激、爾來人間尊重の信念を体得される。明治三十八年（一九〇五）東京哲学館（現東洋大学）に学び暑中休暇を利用して身延山に参詣の折三門付近に群がる癩患者の悲惨な姿とその訴えを聞いて去るに忍びず、祖廟に参籠祈願すること三日、遂に日蓮聖人の啓示を受け救癩の意を決し、日本人最初の私立癩療養所身延深敬園を創立し、自ら園長となって患者の收容を開始した。時に明治三十九年（一九〇六）十月十二日である。因みに園名は法華經常不輕菩薩品の「我深敬汝等」より命名したものである。

当時の社会は癩病を忌み嫌うこと甚だしく、師の偉大な人類愛の慈悲を解する者少なく、幾多の障害と迫害中傷が加えられたがますます救癩の意を固められた。国に社会福祉の施策全くなく、僅かに皇室の御仁慈の他は凡ての経費は師の私財と托鉢や一人一厘講または篤志家の寄付で賄われたのである。

この難事業を成し遂げてこられた所以のものは独り師の不屈の精神と限りない人間尊重の大慈悲心によることは言をまたない所である。

大正九年（一九二〇）七月財団法人の認可を得、更に昭和二十二年新憲法に基づく生活保護法適用施設となり、同二十六年より経常費が国庫補助になったことは当然である。

その間昭和五年（一九三〇）福岡市外巻岐村に身延深敬園分園を開設したが、十七年軍事保護院の要請によって閉鎖の上敷地を提供し、十五年横須賀市大明寺住職となつて同三十年同寺境内に深愛幼稚園を開設する。

深敬園創設以来救癩六〇余年、病友と不幸病没者の遺骨を守りながら、九十四歳を迎えてなお終生の業として不退転の忍苦の行をつづけられる姿

は実に崇高なものである。

この救癩事業について皇室をはじめ内務省、厚生省、県、町当局より恩賞殊遇を受けられたが、その略歴と功績の概要を摘記すれば次の通りである。

（役 歴）

- 一、昭和四年身延山より宗祖六百五十遠忌奉讃会顧問および布教師を嘱託される
- 一、同年日本癩予防協議会員に就任。
- 一、同年身延山より勅額拜戴委員に任命される。
- 一、同十年日本癩学会評議員に就任。
- 一、同二十六年県社会福祉協議会長に就任。
- 一、同三十四年大僧正に昇叙される。
- 一、同三十八年日蓮宗臨時管長に就任したが宗則の変更によって退任する。

（受 賞）

- 身延深敬園創立経営の功績によって次の賞を受ける。
 - 一、大正十年官内省より銀杯を下賜される。
 - 一、昭和三年内務大臣より銀杯を下賜される。
 - 一、昭和五年貞明皇后より銀製花瓶並びに金一封を下賜される。
 - 一、同十一年恩賜財団慶福会総裁より終身奨励金を下付される。
 - 一、同十五年山梨県知事より木杯と金一封を贈与される。
 - 一、同年厚生大臣より聖徳太子像を授与される。
 - 一、同三十二年藍綬褒章を下賜される。
 - 一、同三十九年勲四等旭日小綬章を賜わる。
- 救癩貢献の功績により次の賞を受ける。
 - 一、昭和二十四年厚生大臣より癩予防法施行四十周年式典において表彰される。
 - 一、同二十七年第三十五回癩学会において会長より記念品の花瓶を贈られる。
 - 一、同四十二年「癩を正しく理解する会」の席上財団法人藤楓協会総裁より表彰される。
- 社会事業に尽瘁の功績により次の賞をうける。
 - 一、昭和二十六年山梨県知事より県政功勞者として表彰され副賞を贈られる。
 - 一、昭和二十八年厚生大臣より表彰される。

- 一、同年朝日新聞社より保健文化賞並びに副賞を贈与される。
- 一、同四十三年山梨県教育委員会より文化功労者として表彰される。
- 一、同四十三年日本仏教伝道協会より仏教伝道実践者として仏教伝道文化賞を贈与される。

○殊 遇

- 一、昭和五年大宮御所に参内貞明皇后に拝謁事業に対して御援助金を賜わる。
- 一、同二十四年高松宮殿下深敬園御視察園長以下家族一同に拝謁仰付けられる。
- 一、同二十五年大宮御所に参内貞明皇后に拝謁御下問に奉答木杯を賜わる。
- 一、同四十二年二月十一日身延町名誉町民に推戴される。

○其の他

昭和二十七年より知名寺院信徒篤志家の援助の下に努力を重ね栗生楽泉園に妙法会会堂同三十二年多磨全生園に、同三十三年長島愛生園に、同三十四年邑久光明園に、同三十八年菊池恵楓園にそれぞれ日蓮宗会堂を建立して宗門に寄与する。

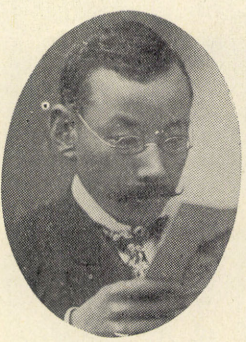
第二章 町の先人

望月小太郎

慶応三年（一八六五）十一月十五日身延に生まれる。山梨県師範学校に入学、官費生となり明治十六年（一八八三）卒業して大里小学校に奉職する。一年余で出京、慶応大学に入学し在学中に議会法その他を翻譯して中井桜州に認められ、卒業して首相山梨有朋に推されてロンドン大学に留学、八カ年政治経済学を修め、パリストルの学位を得て明治二十八年（一八九五）帰朝する。

明治二十八年山梨公に随したがい、ロシア皇帝の戴たが冠式に、翌三十年伊藤博文公に伴われて英国女王即位五十年祭に参列する。

明治三十三年（一九〇〇）伊藤公立憲政友会を組織するに際し、尾崎号堂と志をともして参じ、三十五年山梨県選出衆議院議員となり爾来当選すること七回、国政に参与すること三十余年、議会屈指の雄弁家、政界随一の外交家として名声を馳せ私設外務大臣の称があった。



望月小太郎

明治三十六年（一九〇三）日露の国交急を告げるや单身入露し、そのことに当たって帰国以来開戦の要を説き、三十七年支那に渡り日支の友好につとめ、大正十年（一九二一）第一次世界大戦の終結に際してワシントン会議には海軍軍備の比率に関して強硬意見を吐いて活躍する。

大正十四年（一九二五）憲政会顧問となり国会に明治節設定の建議をなしてその制定をみる。

昭和二年（一九二七）友人の補欠選挙応援中病を得五月十九日逝去す。

日露戦争時の功により勲四等旭日章を受け第一次世界大戦時の功によって勲三等瑞宝章を授けられ、没して特旨をもって従五位に叙せられ旭日中綬章を贈られる。

故山にゆかりをもとめて鷲溪と号し、漢詩文を能くし、書に長じ多数の作品を残している。

著作に「世界における明治天皇」「独逸の現勢」「華府会議の真相」ホーマリー著の「無智の勇氣」を「日米必戦論」として翻譯し、また日刊英文通信・日刊英文日本経済を刊行して世に行なわれた。

記念碑が題字を尾崎号堂、碑文若槻礼次郎撰、望月日謙上人書で身延山竹之坊境内の墓所の脇に建てられている。

身延町が産んだ山梨県を代表する卓抜な政治家で今も郷党は一度外務大臣になって欲しかったと語っている。

大正十年終華府会議向加州

河嶽英霊護此身

論壇百日舌鋒新

微躬唯識酬君国

説尽西隣一億民

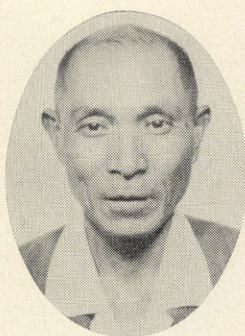
深 沢 義 守

明治三十八年（一九〇五）十月一日身延村大野に生まれる。

日本大学在学中から県下の農民運動に参加し、昭和のはじめから全国農民組合全国会議派県連書記長となり、

全県下の農民運動の指導的役割を果たし、特に昭和五年（一九三〇）奥野田村の小作争議の指導は有名である。また本県最初のメーデーが昭和六年五月一日労働三団体共闘として行なわれたが、その時中巨摩郡東部・東八代郡西

部二地区の指導者として活躍している。この間治安維持法で逮捕されるこ



深 沢 義 守

と十数回、昭和八年山梨共産党事件に連座して投獄され二年間服役して出獄後は郷里を離れる。

昭和二十年敗戦と同時に政治活動に入り、社会党県連組織部長、日本農民組合県連書記長、峡南農民組合委員長となり農民運動に挺身したが、その間に平野力三農相等の右派と袂をわかつて山梨社会党を組織して書記長となり、県下の農地解放、食糧確保に功績を残す。

昭和二十四年一月日本共産党に入党し、衆議院議員選挙に出馬して本県初の共産党代議士となり、国会では予算委員、農林委員として活躍する。

昭和二十七年以降は日本農民組合中央委員として活動をつづけたが、運動方針をめぐる党と対立して共産党を離党する。首都圏住宅生活協同組合常任理事の職にあったが、昭和四十一年十二月十四日病のため六十一歳で没する。昭和四十四年、東京青山墓地の無名戦士の墓に合祀された。

著書に「山梨農民運動史」ほかがある。

若くして農民運動に邁進し終世を農民の地位向上に捧げた情熱は苦闘の歴史であり、山梨県労働運動史に残した足跡は大きいものがある。

市 川 重 門

天保二年（一八三一）九月七日下山村石坂市三郎の二男として生まれ、十三年二月八日和田村市川又左衛門の養子となる。

明治八年（一八七五）八代郡第十六区副区長（区長巨摩郡三十五区長近藤喜則兼務）となり、村・郡・県との連携をとりながら民政に奔走した。

明治十年県会議員区町村総代選挙法によって、公選議員として身延町初の県会議員となり、五月七日より甲府一蓮寺に開かれた第一回県会に出席する。九月第十九区二等書記を命ぜられる。

明治十二年九月第一大学区四十四番中学区幹事を命ぜられ、十三年大河内村学務委員・衛生委員を命ぜられる。

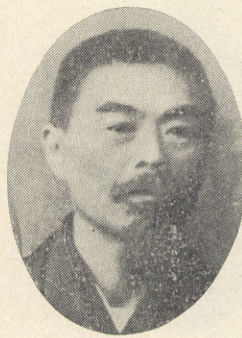
明治十四年四月大河内村戸長五等級に任命され、また招魂社世話掛を命ぜられる。

明治七年学校建築等の功によって表彰される。

明治維新直後の激動する諸制度改革の中にあつて県政に参与し、また村政を担当して十一カ村の合併、学校建設等村民を指導助言して村の基礎づくりにつとめる。

望 月 潔

文久三年（一八六三）一月十七日下山村に生まれる。伴金嶺について漢学を修めること数年、後水戸より漢学者清水栄太郎を招いて下山村山嶺に塾の開設し、多くの村内子弟を教育する。



望 月 潔

明治二十四年（一八九一）県会議員に当選。峡南地区より県政に参加する。二十六年下山村長として村政を担当してその治績を挙げる。

後年子弟教育のため静岡市深草町に転住して、旧制中学校に勤めるかたわら県庁吏員に漢学の教授をなすなど、

教育・行政に深い理解をもち、終生漢学の造詣を活かして大正十五年（一九二六）十一月十一日没する。

藤 田 文 太 郎



藤 田 文 太 郎

文久元年（一八一六）五月一日波木井村に生まれ文海と号した。寺小屋で勉学をつづけ、小学校開設と同時に入学し、卒業後私塾に入り漢学を修める。

若くして区長、学務委員をつとめ明治二十五年（一八九三）村会議員となり、三十年郡会議員に当選し郡農会代表議員となつて河内産業振興に尽くし、特に養蚕業経営の改善向上に努力する。

明治四十四年郡会議員、名誉職郡参事会員、大正四年（一九一四）三たび郡会議員となり、郡会議長に就任した。

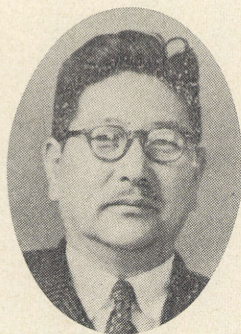
大正八年県議員に当選、名誉職県参事会員に推され、同志会に入り民政党常任幹事となり峡南地方の重鎮として各分野に活躍した。郷党に惜しまれつつ昭和二十三年三月二十八日没する。

村会議員郡会議員各三度歴任して県政に携わり峡南地方の各種産業面に貢献したが、県議在職中に県立身延中学校設立に奔走実現に尽瘁し、身延橋架設を推進するなど郷土の開発につとめている。

当時大身延町実現のために隣接の本建下山豊岡大河内の四カ村に呼びかけ、その実現を夢みた先見の明は五〇年後の今日われわれをうなずかせるものがある。

佐 野 肇

明治三十五年七月五日梅平に生まれ、大正五年身延尋常高等小学校卒業大正十三年交通運輸業をいとなむ父のあとをつぎ、本町近代交通の黎明期に活躍したが、昭和十五年より山林資源に着目して木材業に転じた。



佐 野 肇

昭和二十一年身延町消防団長・町食糧調整委員となり、二十二年五月町会議員に当選するや戦後間もない混乱の町に、はじめて施行された地方自治法に則り町自治に貢献した。

昭和二十五年再び町議会議員に当選し、旺盛な実行力と恵まれた統率力により町議会議長・県消防協会南部支部長・町農地委員・町農協組合長・身延中学校PTA会長を歴任して町行政に大きな足跡を残している。

昭和二十六年町民に推されて県議員に立候して見事当選、以来四期連続当選して本町はいかに及ばず峡南地域の開発に県政を通じて尽瘁裨益した功績は大いなるものがある。

昭和二十六年以降十六年の長い間、県政界にあつて県議会管理局誘置特

別委員会副委員長、土木委員長、県議会運営委員長の職を経て、三十二年第五十一代県議会副議長の要職につく。また政党人としては自由民主党山梨県支部連合会副会長として県議会政治に貢献した峽南を代表した政治家といえる。

昭和四十四年三月三十一日急逝して、今更にその功績をしのばせている。四月二十二日付をもって、正六位勲五等双光旭日章を贈られる。

清水 為八

天保四年（一八三三）九月三日横根村に生まれる。

明治維新の際名主をつとめており明治二年（一八六九）の古文書によると、河内領五十有余年にわたって歎願をつづけた三榎楮壳捌ぎに関する歎願書にも、河内八三カ村の代表として名が見え、河内南部諸村の地方代表として若くして名を連ねて活躍している。

明治五年以来戸長をつとめ、八年副区長佐野正熹を助けて下山身延豊岡三カ村の学校建設に腐心して県より表彰される。十年（一八七七）四十四番中学区小学校幹事を命ぜられる。



清水 為八

明治十一年駿州往還（下山横根間）開鑿を推進協力し、十二年豊岡小学校改築促進実現を見て、それぞれ県より表彰される。

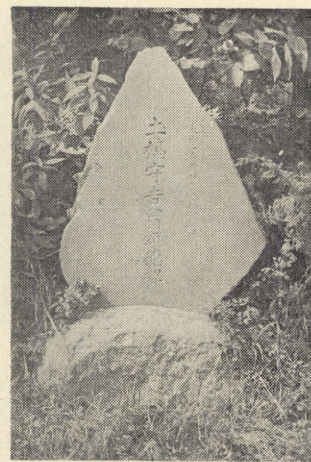
明治十四年（一八八一）豊岡村戸長四等級を命ぜられる。十七年身延村豊岡村連合戸長を命ぜられる。十九年諏沢警察署南部分署増築に協力して表彰をうける。明治二十二年町村制施行により身延豊岡連合村長となる。連合を解くにあたり二十三年豊岡村長となる。

明治三十六年（一九〇三）八月二十九日七〇歳で没する。

江戸から明治へ、名主から村長へと黎明時の村政を担当して産業・交通・治安・教育と幅広く活躍し村政発展の礎を築いた先達といふことができる。

土橋 守吉

文久二年（一八六二）十月二日下山村に生まれる。



土橋守吉の頌徳碑

少壮より村政に参与して明治四十三年（一九一〇）村長に就任する。時あたかも四十年の大水害に遇い村民生活の窮乏に喘いでいる八月、再度の水害に見舞われ家屋田畑流夫の災を受けて惨状目を蔽うものがあつた。為政者としてその救済に心胆をくだく。当面の救済措置と同時に恒久的治山治水と築堤に奔走して、一号堤より五号堤を完成し、財政再建に苦心し御料林六三ヘクタールの払い下げ請願を計画し、遂にその実現を見た。村民とともにその植栽育成につとめた結果、今日もなお仙王外五山恩賜林保護財産区として現存し、昭和二十八年の小学校建設等の資金となり、その他教育施設拡充に寄与している。

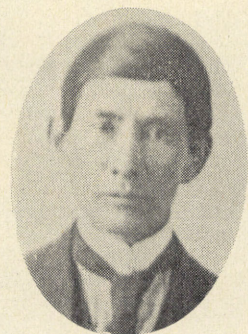
大正七年（一九一八）五月十七日死去するや望月鶯溪翁はその死をいたんで墓石を建立した。

後年為政者として百年の大計を樹て、村民福祉に尽した遺徳を偲んで、村民は下山村荒町に頌徳の碑を建て永くその功を讃えている。

長谷川 栄三郎

明治六年（一八七三）帯金村塩之沢に生まれる。

家業の木材業雜貨商を父とともに営む。明治三十五年（一九〇二）米国シヤトルに渡り、ホテルに勤務してその経営を学び、後独立してホテル、アパート経営をする。滞米一五年父死亡のため帰国して雜貨商を営んだ。大正十年（一九二二）大河内村消防組頭となり、大正十四年（一九二五）一月より身延自動車株式会社の経営に参加、かたわら身延橋際で当時とし



長谷川 栄三郎

ては近代的なホテルを営業した。老齡のため廃業するに当たって日本赤十字社に金五万円を寄付した。その間大河内村会議員を二期つとめる。

在世中郷土子弟育英に関心をよせて山林寄付を思い立ったが果たさないうで昭和二十三年十二月二十四日病のため

没した。

ひで未亡人は夫の遺志をつぎ、昭和二十六年私有の竹之沢の山林二五・三ヘクタールに隣接山林購入費として金一万円を添えて学校造林地として大河内村に寄付する。昭和四十年植林完成に当たって地区財産区管理会長・大河内中学校長より表彰を受ける。

なお第二次世界大戦中、村内出征者に対して金百円を贈ってその壯途を激励したことは今も語りつがれている。

地域社会の公共福祉につくした篤志によって将来住民は長くその恩恵に浴することであろう。一部にはその徳を称えて記念碑建設の議もあるという。

佐野 熊太良



佐野 熊太良

元治元年(一八六四)九月十四日門野村に生まれる。若くして徽典館師範学科に学び、身延小学校に赴任、一〇カ年の間訓導・校長として勤続し二十九年豊岡小学校長となり、一四カ年の長い間子弟教育に専念の後、四十三年四月三里地区統合校校長に迎えられ、三カ年僻地教育の基礎を確立、その任を終えて退職する。昭和九年山梨県教育会創立五十周年記念祝典にあたり郡下五指のうち選ばれて教育功労表彰をうける。

三十年間郷村子弟の教育に身を捧げ、時に敵父となり慈父となって率先窮行の教育に徹し、躰しけの厳しさは教え子の語り草となっている。教え子の中から大村朋市・松田寛・古屋金吉等の名校長が輩出し後に続いている。

還暦にあたって郷村多数の教え子相はかつて祝賀会を開き肖像画を身延小学校、豊岡小学校および三里小学校に贈って長くその温顔に接することを願う、現在豊岡小学校に掲げられている。

退職後は村の相談役として教え子のよい相談相手となり、その面倒をみることを唯一の楽しみとしたが、昭和十四年十月十六日郷人に惜しまれながら没する。

松 木 喬

慶応元年(一八六五)二月十山下山村に生まれる。幼少の頃儒者早川貞哉に師事して漢学を学ぶ。明治十九年(一八八六)三月徽典館師範学科卒業とともに下山小学校訓導となり、二十年十一月中巨摩郡東部小学校に転じ翌二十一年七月下山小学校長となって帰任する。



松木 喬

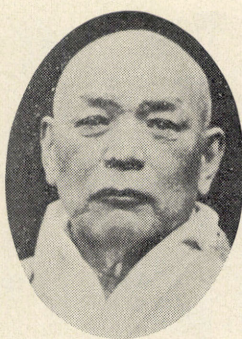
奉職すること三五カ年、勤続すること三三カ年の長い間下山地区の子弟教育に傾注し、退いて大正十一年(一九二二)四月村長となって村政を司つかさどりに村父として村民に敬仰されたが病を得て大正十二年十月十日没する。

その間勤続表彰を受けること二回、勲八等に叙せられ、学校林の設定、各樹種の播付、苗木の育成、植林法の指導に率先垂範し、また日露戦勝記念、御大札記念として生徒とともに五千本余の杉檜を粟倉増野に植栽して学校基本財産とした。これが村有林経営の基となって今に至っている。

昭和三十年門下生村民総意によりその功績をたたえて下山小学校校庭西の八幡社境内に頌徳碑を建て、その徳を伝えている。

望 月 日 謙

慶応元年（一八六五）二月八日身延に生まれる。明治九年（一八七五）雨畑正徳寺日龜上人により得度する。十一年身延山大棟梁池上宗治を介して法主日鑑上人に任える。



望 月 日 謙

身延中教院に学び明治十七年（一八八四）身延山定林坊住職となる。十九年堀之内妙法寺日恕上人に隨身東京大檀林に入學、二十三年卒業して堀之内宗学林教師となる。

明治二十五年（一八九二）鏡中条の長遠寺住職となり、二十七年是忠を日謙と改め三十四年大僧都に叙せられ、三十八年留守近衛師団司令部より軍隊布教師を命ぜられて従軍、帰還後布教に従事した。四十一年権僧正に叙せられ、四十二年函館の実行寺住職となる。

大正二年（一九一三）日暮里善性寺住職となり、八年僧正に叙せられ十五年日蓮宗宗會議員日蓮宗務院庶務部長を経て宗務総監となる。昭和三年権大僧正に叙せられ四年身延町清分寺住職となる。その間山梨普通学校長・日蓮宗大学学監、同理事・昭和六年立正大学専門部長を歴任し、昭和六年立正大学学長となつて七年身延山八十三世の法灯を嗣ぎ、十一年大僧正に叙せられて日蓮宗管長に就任する。昭和十八年（一九四三）九月二十三日七九歳で遷化した。

幼少より父母の膝下を離れて艱難に堪え、行学一五年で国三役寺の住職となり、祖道を窮行して四十年立正大学学長、身延山八十三世をついで八百万信徒の尊崇をあつめた。

「われは日蓮大聖人の法子である」「父とは日蓮なり子とは日蓮が弟子檀那なり」の信をもつて信行道場を開設して宗風を振起し、全国布教の先達となつて立正報國運動を展開し、また、「日蓮聖人の降誕の意義」と題して宗教界初の海外放送をして海外同胞はもろろん、全世界に宗義の弘通

をはかる。

明治二十七年（一八九四）身延山特撰議員となつてより身延山門末議員・身延山山林護持會議員・常置會門末議員会長を歴任して身延山のために尽瘁し、身延山入山後は祖廟・本師堂の整備・一乗学苑の創設・祖山学院中・高等部の昇格・昭和十四年（一九三九）身延高等女学校校舍建築寄進等宗門地域の教育に多大の貢献をする。

上人かつて明治十四年（一八八一）（十七歳）日蓮聖人六百遠忌の時、所持の和漢洋新撰年表に「明治六十四年我が六十七歳の時は身延山の貫主になるべく奮闘努力せよ」と自記しておられるがその通り昭和七年六十八歳で身延山の狷座につかれた精進努力の人で、興学に布教に身延山興隆に挺身されたのは近世稀にみるところであり、身延山近代の名法主と瞻仰される所以であつて身延が産んだ不世出の名僧高識である。

望 月 歆 厚

明治十四年（一八八一）八月十二日身延村身延に生まれる。二十一年（一八八八）七月三島市本覚寺住職津田日厚の弟子となり、二十二年身延



望 月 歆 厚

望月甲春の養子となる。明治四十三年（一九一〇）日蓮宗大学本科卒業、卒業論文「寿命所顕本覚三身論」を提出して審査員の激賞を得、大正十二年（一九二三）三島市本覚寺住職となる。十五年立正大学文学部教授となつてより昭和四十二年まで五十有八年、

ひたすら宗門子弟の教育に尽瘁しその間京都帝国大学文学部講師・立正大学文学部部長・立正大学学長兼専門部長・立正大学宗学研究所長の要職を歴任している。

昭和十九年権大僧正に叙せられ、二十年小室山妙法寺住職となり、三十二年「日蓮宗教学の研究」によつて、文学博士の学位を純粹宗学にて得た最初の人となる。同年大僧正に昇叙、三十九年藍綬褒章、四十一年勲三等瑞

宝章を受ける。また二十五年三島市本覚寺内に幼児情操教育の一環としてあさひ保育園を開設する。昭和四十二年十一月二十八日遷化した。

宗学の鼻祖と称せられその碩学せきとなり五十余年を宗門子弟教育に捧げて立正大学の歴史とともに歩み、学長となつては戦後学校経営の困難を克服して今日の盛大を招来し、宗門の発展につくし、齡八十余歳に至つてなお筆をおかずに日蓮宗教学研究所員を激励して「日蓮宗読本」「日蓮教団全史」の編集発刊をなす等、一意欣求ごんぐの終生の足跡は偉大なるものがある。

著書に前述のほか「法華経の精神と日蓮聖人」「口語訳日蓮聖人全集」「仏典説話」等十五著、論文に「日蓮聖人と聖徳太子」「日蓮宗学より見たる生死」等四十七編、未刊書五の多数の宗門関係書がある。

